



贈るこころ・受けとられた美  
 —世界の国々との交流のなかで

Heartfelt  
 Works of Art

Received

In Course of Imperial Household's

Friendly Exchanges with Foreign Countries



宮内庁三の丸尚蔵館

The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

# 贈るこころ・受けとられた美

—世界の国々との交流のなかで

## Heartfelt Gifts — Works of Art Received

— In Course of Imperial Household's Friendly Exchanges with Foreign Countries



平成 17 年 1 月 8 日（土）— 2 月 27 日（日）

January 8(sat.) — February 27(sun.) 2005



宮内庁三の丸尚蔵館

The Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan

## 目 次

- 3 ごあいさつ
- 4 Foreword
- 5 皇室の外国交際と受けとられた美の品々  
ー昭和天皇の2回のヨーロッパご訪問を中心にー
- 9 図版・解説
- 40 参考資料ー大正10年・昭和46年ヨーロッパ諸国ご訪問ご日程
- 41 出品目録
- 42 List of Exhibits

## 凡 例

- 本図録は、平成17年1月8日（土）から2月27日（日）までを会期とする展覧会「贈るこころ・受けとられた美ー世界の国々との交流のなかで」の解説図録である。
- 図録掲載の作品番号は、展示会場の出品番号と一致する。
- 各作品のデータは作者、作品名、制作年、技法・材質、サイズ、伝来の順で記載している。  
伝来に記した各国の国名は、原則として贈進を受けた年の名称で表記している。
- 図録中に掲載した作品のサイズの単位はcmである。特に記さない限りは縦（奥行き）×横（幅）×高の順で表示した。
- 本展覧会の企画および図録の編集は三の丸尚蔵館学芸室研究員・五味聖、岡本隆志が担当した。概説は五味が執筆し、作品解説は以下のように分担執筆とした。作品番号1、2、23～30（五味）/3、10、17（主任研究官・太田彩）/4～6、11、16、18、22（主任研究官・大熊敏之）/7～9、12～15、19～21（岡本）
- 図録掲載の写真は当庁嘱託カメラマンの撮影による。

## ごあいさつ

当館では、海外のさまざまな美術、工芸品に焦点をあてた展覧会をこれまで3回開催してきました。海外作品を特集する展覧会として4回目になる本展では、主として、皇室が世界の国々と交際される中で、親善のかたちとして贈進を受けられた品の数々を紹介しします。これらは皇室のご慶事の折に贈られたものをはじめ、賓客として来日された元首や王族方から贈られたものが中心をしめています。また、昭和天皇が皇太子として大正10年にご訪欧された折や、さらには歴代の天皇として初めて外国をご訪問された昭和46年の両陛下ご訪欧の際に、各地でお受けになった品々も含まれています。

明治から昭和初期にかけての時代に贈進を受けられたものには、ヨーロッパの絵画、彫刻、ガラスや陶磁器などの工芸品のほかに、タイの伝統的な金工品や漆工品、トルコの刺繍ししゅう作品などがあります。一方、昭和後期にあたる時代のものとしては、美術、工芸品に加えて、アメジストや銀の小箱、ブローチなどの宝飾品が含まれています。

これらは、いずれも各国が育んできた文化はくくを代表するものとして選ばれた品です。皇室の外国交際という大切なご活動のなかで、世界の国々から親愛の気持ちをこめて贈られたこれらの品々を通じて、その友好のところに触れるとともに、美術品としての多彩な魅力を楽しんでいただければ幸いです。

平成 17 年 1 月

宮内庁三の丸尚蔵館

## F o r e w o r d

Our museum has so far sponsored three special exhibitions focusing on a great variety of arts and crafts products of foreign origin. In this and fourth exhibition of the same line of shows, we introduce you to a wide range of gift items presented to the Imperial Family in the course of its friendly exchanges with a variety of foreign countries. The items include those offered on various felicitous occasions of the Imperial Family, those presented by visiting royal families and heads of state as well as those offered to Emperor Showa, both in 1921 when His Majesty visited Europe as Crown Prince, and in 1971 when His Majesty, together with Her Majesty, toured foreign countries for the first time as the Emperor of Japan.

Included among the gifts offered in the Meiji era to the early Showa period are European paintings, sculptures, various crafts products, including glass and ceramic wares, as well as gold items and lacquer wares from Thailand, and embroideries from Turkey. Among the gifts received in the late Showa period, on the other hand, include a variety of arts and crafts products, small boxes of amethyst and silver, brooches and other ornamental items.

The items on display are all choicest representatives of the cultures of the gift-giving countries. Our sincere hope is that the visitors to the exhibition will fully enjoy the variegated charms of the exhibits themselves and, at the same time, duly appreciate the spirit of international friendship as expressed in all those gift items presented to the Imperial Family in the course of its all-important international exchange activities.

January 2005

The Museum of the Imperial Collections,  
Sannomaru Shōzōkan

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第36回 贈るころ・受けとられた美—世界の国々との交流のなかで)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	銀製花盛器		一点	1898年頃	p. 10
2	花文蒔醬水入鉢		一对	1932年頃	p. 11
3	紫天鷲絨地花文刺繍卓被		一点	1888～89年頃	p. 12-13
4	ライオン狩り		一点	20世紀初頭	p. 14
5	うちひしがれたカリアティード (原題: Caryatid)	オーギュスト・ロダン	一点	1880～81年	p. 15
6	アテナ像	ジュール・クータン	一点	19世紀末～20世紀初頭	p. 16-17
7	植物文花瓶	エミール・ガレ	一点	1896～1904年頃	p. 18
8	菊銀杏文花瓶	C. ピアン(絵付デザイン) /国立セーブル製陶所	一对	1908年	p. 19
9	白熊図花瓶	オラス・ビューヴィル (絵付デザイン) /国立 セーブル製陶所	一点	1920年	p. 20-21
10	ゴブラン織扇形衝立	ロベール・ボンフィス (原画) /国立ゴブラン 製作所	一点	1918年	p. 22
11	ボルガ河畔の乙女	ボリス・クストージェフ	一点	1916年	p. 23
12	蓋付壺	エードヴァルド・ハルド (デザイン) /オレ フォッシュ・ガラス工場	一点	1923年頃	p. 24
13	蓋付壺	エードヴァルド・ハルド (デザイン) /オレ フォッシュ・ガラス工場	一点	1920年代前半	p. 25
14	赤被せガラス花盛器	ユベール・フアルジュ (デザイン) /ヴァル・ サン・ランベール・ガラ ス工場	一点	1923年頃	p. 26
15	赤被せガラス花瓶	ヴァル・サン・ランベール ・ガラス工場	一点	1928年頃	p. 27
16	本を持つ少女	ボリス・カーリン	一点	1968年頃	p. 28
17	草花文様壁掛	ジャン・ヴァンノーテン (原画) /シャドワール 工房	一点	1971年頃	p. 29
18	南風(原題: Le Vent du Sud)	ギュスターヴ・カミュ	一点	1971年	p. 30
19	四季(原題: De Fire Årstider)	フィン・リンゴー	四点	1981年	p. 31
20	白熊	ハーデラン・ガラス工場	一点	1983年頃	p. 32
21	ブルー・フィッシュ (原題: Blue Fish-The Coelacanth)	ジャンヌ・グリユー(原 型) /ロイヤル・コペン ハーゲン磁器製作所	一点	1971年頃	p. 33
22	牛追い	ウンベルト・ベラサ	一点	1978年頃	p. 34
23	金細工ハンドバック		一点	1956年頃	p. 35
24	銀製白粉入		一点	1963年頃	p. 35

25	貝細工扇子		一点	1972年頃	p. 36
26	アメジスト香箱		一点	1963年頃	p. 37
27	銀製小箱	ガロード社	一点	1917年頃	p. 37
28	ブローチ		一点	1966年頃	p. 38
29	ブローチ	アンドリュウ・グリマ	一点	1971年頃	p. 38
30	ブローチ		一点	1984年頃	p. 38

# 皇室の外国交際と受けとられた美の品々

## －昭和天皇の2回のヨーロッパご訪問を中心に－

三の丸尚蔵館には、明治期以降に海外からもたらされた美術品が数多く所蔵されている。これらの中には、調度品、装飾品として使用するために購入された品もあるが、多くは、明治期から皇室が外国と交際されるなかで各国の元首や王族方、各方面の代表者等から贈られ、皇室に引き継がれてきたものである。そのうち昭和天皇へ贈られた品は、数、種類ともに最も多く、外国ご訪問や外国賓客を迎えられた際に贈られたものや、ご結婚やご即位などのご慶事の折に受け取られた世界各地からの品々など、様々な伝来のもとに、実に広い分野にわたっている。外国交際のご活動の中で、昭和天皇が最初に贈進を受けられた品は、大正10年(1921)に皇太子としてヨーロッパ諸国をご訪問された折のものである。この後、戦争により各国との親善を重ねるには困難な時代を経て、2回目の外国ご訪問が実現されるまでは長い時間が要されたが、ちょうど50年後の昭和46年(1971)に昭和天皇ならびに香淳皇后はお揃いでヨーロッパを再訪された。このご旅行は、歴代の天皇として初めての外国への公式ご訪問であり、香淳皇后にとっては、ようやく実現した最初の外国ご訪問であった。半世紀を隔てて行われた昭和天皇の2回にわたるヨーロッパご訪問は、明治期以降続けられてきた皇室の外国交際の大きな節目となるものであった。

そこでここでは、大正10年と昭和46年のヨーロッパ諸国ご訪問について、各地で触れられた文化、美術を中心にそのご足跡をたどるとともに、贈りものとして受け取られた本展出品作品を紹介していくこととする。

なお、参考資料としてご訪問の日程を本図録40頁にまとめている。

### (1) 皇室の外国交際のはじまり

#### －皇太子裕仁親王のヨーロッパ外遊まで

大正10年当時に皇太子がヨーロッパまで外遊されるのは、皇室が歩まれた長い歴史の中でも初めてのことであった。だが、それに先立って、明治の早い時期から皇族の方々の留学、ご訪問は行われており、また、各国の元首との親書や親電の交換、元首や王族方の慶弔に際しての御名代の差遣、来日された賓客の御接遇、在日大使の御引見などを通じて皇室は外国との交流を深められていた。このような外に向けた積極的な外国交際の活動を踏まえられたうえで、皇太子裕仁親王のヨーロッパ諸国ご訪問が実現したといえる。このヨーロッパ

諸国ご訪問の目的は、国際親善を進めることはもとより、皇太子ご自身が各国の文化や施設をご視察され、東宮御学問所でご修得された成果をもって実地に学ばれることにあった。ご出発されたのは第一次大戦ののち間もない頃のことであり、ヨーロッパ諸国には戦火のあとが生々しく残り、国境に変化がもたらされ、歴史ある王室が消滅するなど世界的にも大きな変動を迎えた折のご訪問であった。ここでは皇太子裕仁親王のヨーロッパでのご足跡をたどる前に、明治期から大正10年までの外国交際の例を本展出品作品を交えながら、いくつか簡単に紹介しておく。

皇室の外国交際は、明治2年(1869)にイギリスのエジンバラ公アルフレッド王子(ヴィクトリア女王第2王子)が来日したことに始まる。『明治天皇紀』には、この時の滞在中、本国のヴィクトリア女王に対して宸筆の御製のほか蒔絵見台、十種香箱などが明治天皇より贈られたことが記されている。翌年には東伏見宮嘉彰親王がイギリスに留学、その後、皇族方の留学、ご訪問が相次いで行われた。嘉彰親王(明治15年には小松宮彰仁親王とご改名)は、国際親善のため、明治19年からイギリス、フランス、ドイツ、ロシアなどヨーロッパを中心に各国を歴訪され、明治20年にはイスタンブールに皇帝アブデュル・ハミド2世(在位1876-1909)をご訪問、明治天皇の親書を手渡された。この答礼として、トルコ皇帝の公使オスマン・パシヤが明治23年来日しており、この時、《紫天鷲絨地花文刺繡卓被》(出品番号3)が贈られた。この豪華な刺繡がほどこされた卓被は、本展出品作品のなかでも贈進年の最も遡るものである。

また、シャム国(現在のタイ王国)とは、ラーマ5世チュラロンコーン国王(在位1868-1910)と明治天皇がその在位の時期をほぼ同じくして、ともに自国の近代化の道を歩まれたこともあり親しく交流を重ねられた。明治20年に外務大臣テワウオン王子が来日され「日暹修好宣言書」に調印して正式に国交が樹立されたことから交流が始まり、その後、王族方がたびたび来日、明治44年のラーマ6世ワチラウト国王(在位1910-25)の戴冠式には日本からも伏見宮博恭王がシャム国を訪問されている。シャム国に初めて公使館が設置された翌年、明治31年にチュラロンコーン国王から明治天皇に贈られた《銀製花盛器》(出品番号1)は、このような当時のタイ王室との交流を示す一品である。

こうした各国の王室とのお付き合いの中でも、特に英国王室とのご関係は深く、明治39年にはコンノート公(ヴィクトリア



女王第3王子)が女王の御名代として来日、明治天皇にガーター勲章が贈られている。明治44年のジョージ5世(在位1910-36)戴冠式には東伏見宮依仁親王が明治天皇の御名代として出席された。この後、戴冠式がとりおこなわれる折には、御名代として皇族が訪英し、日本の歴代天皇にガーター勲章が授与されるご関係が続けられている。そして大正10年の皇太子ヨーロッパ諸国ご訪問に際しては、イギリスは最初の訪問国に選ばれたのだった。

## (2) 大正10年皇太子裕仁親王のヨーロッパ諸国ご訪問

皇太子裕仁親王のヨーロッパへのご出発は3月3日、この時、御年19歳であった。当時は船による長旅で、御召艦「香取」に乗船され、那覇、香港、シンガポールを経てインド洋、スエズ運河を通過し、4月18日にカイロに到着された。ここでは砂嵐の中、ピラミッド、博物館をご視察されている。この後、地中海をぬける洋上で20歳のお誕生日を迎えられた。

ヨーロッパでの最初の訪問国イギリスには5月9日にご到着、バッキンガム宮殿にて国王ジョージ5世主催の公式晩餐会が行われた。このイギリス滞在では、ジョージ5世より親身のご接待を受けられた。後に昭和天皇は、宮内記者会とのお会いの中で、皇太子時代のいちばん印象深い思い出として、この半年にもおよぶ各国ご訪問の旅を幾度もあげられており、特に、ジョージ5世からイギリスの立憲政治の在り方について、親しくお話しがあったことを述べられている。

翌日からエドワード皇太子(のちのエドワード8世)のご案内でウィンザー宮をご訪問、カーゾン外相主催の歓迎会、ロンドン市庁舎のギルド・ホールでの歓迎会などさまざまな歓迎行事にご出席された。この後、ロンドンをはじめスコットランドの各地、マンチェスターなどをご訪問になり20日間をイギリスで過ごされた。ナショナル・ギャラリー、大英博物館のご視察、オックスフォードをご訪問、18日にはケンブリッジ大学でタンナー博士より「英国皇室とその国民との関係」をテーマに御進講を受け、その後、名誉法学博士の学位を授与された。英国ご滞在の最後の29日には、画家オーガスタス・ジョンのアトリエをご訪問され、ご肖像のスケッチを許されている。

第2の訪問国フランスには6月1日にご入国、エリゼ宮にミルラン大統領(在職1920-24)をご訪問になった。この時、ミルラン大統領より、この前年に国立セーヴル製陶所で制作された《白熊図花瓶》(出品番号9)が贈られている。次の日にはパリ在留邦人を御引見され、このパリ滞在中に、パリ日本人会からフランスを代表する彫刻家、ロダンの作品《うちひしがれたキャリアティード》(出品番号5)が献上された。フランスには6月10日まで滞在、ベルギー、オランダをご訪問の後、再びパリに滞在されている。この2回のご滞在のなかで、ルーブル美術館、ベルサイユ宮殿の他、国立セーブル製陶所などをご

視察された。パリでは地下鉄に乗車、古美術店で買い物されるなど、生まれて初めてのご経験もなされた。23日にはライン川下りを楽しまれ、その後、ヴェルダンやソンムなど、大戦の激戦地をご視察にまわられた。

ベルギーには6月10日に入国され、ブリュッセル駅で国王アルベール1世(在位1909-34)のお出迎えを受け、その夜、公式晩餐会が開かれた。大戦時、ベルギー国土の大部分がドイツ軍の侵入を受け、各国の軍隊が入り乱れて戦ったこともあり、ベルギー滞在中は、戦火のあとも生々しい各地の戦跡を中心に視察された。こうした日程のなかでも、6月14日にはアントワープ市庁舎にお立ちより、大聖堂ではルーベンスの祭壇画をご覧になった。

翌日にはアントワープよりオランダに入られ、アムステルダム王宮にウィルヘルミナ女王(在位1890-1948)をご訪問になり、晩餐会に臨まれた。オランダではアムステルダム国立美術館にてレンブラントの代表作《夜警》をご覧になり、翌日にはハーグ平和宮をご視察、平和宮創立の折に日本から寄贈された「綴錦壁掛」をご覧になった。6月20日にはベルギーを経由されて再びパリへ入られ、7月7日までご滞在された。

パリを御出発後は、トゥーロンより再び「香取」にご乗船。ナポリを経由して7月12日にローマに到着し、この日、エマニュエーレ3世(在位1900-46)による晩餐会に臨まれた。イタリアはとりわけご訪問を楽しみにされていたと伝えられるが、短い日程の中で各地をご視察されている。翌13日にはボルゲーゼ美術館などをご覧になり、ナチオナーレ街で行われていた美術展覧会では特に気に入られた絵画作品をお買い上げになられたという。その後には国王とともにコロッセウムをはじめとした古代ローマ遺跡をご視察された。15日にはバチカン市国にローマ教皇ベネディクト15世(在位1914-22)をご訪問された。バチカン市国ではサンピエトロ聖堂、バチカン教皇庁の博物館を2日にわたって見学され、教皇庁に所属のモザイク製作所もご訪問されている。当館は、このご旅行より持ち帰られたとの伝来がある教皇庁前の広場を表したモザイク作品を所蔵しており、また、本展出品のモザイク作品《ライオン狩り》(出品番号4)は、大正13年の皇太子御成婚の折にローマ教皇ピウス11世より贈られた品であるが、これらの作品は、教皇庁所属のモザイク製作所あるいはその周辺で作られたものかと推測される。18日にはポンペイの遺跡をご視察を最後にナポリをご出発になり、帰国の途につかれた。横浜に到着されたのは9月3日ちょうどご出発から半年が経過していた。

この大正10年のヨーロッパご訪問の後、昭和初期まで、各国の王族方の来日が相次いだ。皇太子ヨーロッパ諸国ご訪問の答礼として翌11年1月、最初に日本を訪れたのはフランスのジョッフル元帥であった。4月には英国エドワード皇太子が答礼訪問された。この時、皇太子裕仁親王はご案内役を務め

られた。大正13年にはシャム国プラチャーティポック王子(後の国王ラーマ7世)が来日、大正15年スウェーデン国皇太子、昭和4年グロスター公(ジョージ5世の第3王子)、同5年デンマーク国皇太子、6年にはラーマ7世プラチャーティポック国王、と賓客の来日が相次いだ。また、日本からは大正14年の秩父宮雍仁親王英国ご留学、昭和5年の高松宮宣仁親王、喜久子妃のご外遊、昭和12年雍仁親王、勢津子妃の英国ジョージ6世戴冠式ご出席と昭和天皇の弟君方が外国をご訪問された。

このように皇室が外国とのお付き合いを大切にされながらも、時代はそうした関係から逆行する方に向かった。昭和16年に起きた戦争により、昭和天皇と香淳皇后のヨーロッパご訪問が実現するまでにはしばらく時間を要することとなった。この間、昭和28年には皇太子殿下(天皇陛下)が、皇族として戦後はじめて外国をご訪問され、昭和天皇の御名代として英国女王エリザベス2世陛下の戴冠式にご出席された。これ以降、皇族方が相次いで外国をご訪問されている。

### (3) 昭和46年の昭和天皇 香淳皇后ヨーロッパ諸国ご訪問

昭和46年のご訪問は、9月27日から10月14日までのご日程で、ヨーロッパ7カ国(デンマーク、ベルギー、フランス、イギリス、オランダ、スイス、西ドイツ)を歴訪された。このうち公式訪問はベルギー、イギリス、西ドイツの3カ国であり、戦後に来日された元首、王族方に対する答礼、国際親善のためのご訪問であった。このご訪問では各地で盛大な歓迎を受けられ、滞在された各国で元首、王族方とご贈進品のお取り交わしがあり、各方面より献上の品をお受けになった。本展でもその一部を紹介している。

このご訪問は50年前とは違って飛行機に搭乗しての空の旅で、途中給油のために寄られたアンカレッジにてニクソン米国大統領とご会見された。最初のご訪問国はデンマークで、非公式のお立ち寄りではあったが、コペンハーゲンの空港まで国王フレデリック9世ご夫妻がお出迎えされた。デンマーク滞在中、ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所をご訪問され、絵付け作業などを御覧になった。この時、同所よりシーラカンスをかたどった《ブルー・フィッシュ》(出品番号21)が贈られている。生物学を専門にご研究されていた昭和天皇にふさわしい贈り物として選ばれた品といえよう。その後、アンデルセンの童話で知られる人魚の像をご覧になり、フレスデンスボー宮殿で国王ご一家と午餐をともにされた。

最初の公式訪問国であるベルギーには3日間滞在された。ブリュッセルで国王ボードワン1世ご夫妻のお出迎えを受け、ラーケン王宮で公式晩餐会が開かれた。国王ご夫妻からはこのご訪問の折に、《草花文様壁掛》(出品番号17)が贈られた。ベルギーではアントワープ、シャルルロワ市をご訪問された。アントワープ市庁舎では50年前に昭和天皇をご訪問された折

の署名を香淳皇后もご覧になった。シャルルロワ市では、ダチョウの羽の帽子をかぶった踊り子たちによる「ジル」という復活祭のにぎやかな踊りに迎えられたが、この際、香淳皇后は踊り手達から、この踊り手をかたどった人形を贈られた。絵をたしなまれた香淳皇后は、ご帰国の後、「旅の思い出」としてこの人形を写生されており、「シャルルロワ市ジルの踊り手」と画中に題されている。シャルルロワ市からはこの他、同市ゆかりの画家、ギュスターヴ・カミュの描いた油彩画《南風》(出品番号18)が贈られている。

次のご訪問国、フランスでは公式行事からは離れたご滞在となった。エリゼ宮にてポンピドー大統領と午餐をともにされた後、パリ市内各地を回られた。昭和天皇にとっては若き日に親しまれた思い出深い街であり、50年前のご滞在の折のご訪問地をたどるように、ノートルダム寺院をはじめ、サント・シャペルでステンドグラスをご覧、またオペラ座やエッフェル塔へも立ち寄られた。ルーブル美術館をご訪問、フォンテンブロー宮殿をご散策、秋の美しい森に囲まれた庭でひとときを過ごされた。滞在3日目、ベルサイユ宮殿をご覧になった、そのお帰りの途中、ブローニュの森にウィンザー公(エドワード8世)ご夫妻をご訪問、半世紀ぶりにその旧交を温められた。

イギリスには10月5日に到着された。ロンドンのビクトリア駅からバッキンガム宮殿までの3キロにわたるエリザベス2世女王陛下と馬車に同乗されてのパレードは、50年前に昭和天皇が国王ジョージ5世にご案内された時と同じように、華やかに優美に執り行われた。この時のご様子を香淳皇后は御歌にも残されている。バッキンガム宮殿にご到着後は、エリザベス2世女王陛下からヘンリー・ムーアの彫刻、ダイヤモンドの《ブローチ》(出品番号29)が贈られている。ロンドンではロイヤル・ソサイエティー、リンネ協会、動物学協会などをご訪問、自然科学博物館では生物学の中でもご専門とされていたヒドロ虫類のご研究を深められた。

オランダおよびスイスには公式ではなく国際親善のためのお立ち寄りで、アムステルダム国立美術館では50年前と同じくレンブラントの《夜警》をご覧になり、スーストダイク宮殿でユリアナ女王との午餐に臨まれた。スイスでは、赤十字国際委員会をご訪問後、ドライブされるなど、休養も兼ねてゆったりとした時間を過ごされた。

最後のご訪問国の西ドイツは公式のご訪問で、ボン市庁舎、ケルン市庁舎をご訪問になり、ローマ時代の遺跡や発掘品であるローマン・グラス作品の数々をご覧になった。ブリュール城で行われた公式晩餐会の翌日には、ライン河下りを楽しまれ、ベートーベンの生家をご訪問された。こうして行程約三万キロにおよぶ18日間のご日程を無事に終わられて、10月14日にご帰国された。このように昭和46年のご訪問は、大正10年のご訪問地を再訪し、旧交を温められるとともに、各国

の国民と直に触れ合われた旅でもあった。

ここまでたどってきたように、ご訪問の先々では各地の文化や歴史を代表する遺跡や建造物、寺院、美術館、陶磁器製作所などを精力的にご視察されている。そしてご視察になられた各地から、これらの文化をご帰国後も親しんで頂くために、美術工芸の作品を中心とした品々が昭和天皇ならびに香淳皇后に贈られたのである。旅の先々でお受けになられたこれらは、実際にお手元に飾りおかれていたことがお写真や作品に付された伝来などから読みとることができる。香淳皇后におかれては贈られたブローチを装いに合わせてご使用になるなど、ご日常の中で大切にされていたご様子がうかがわれる。

平成の今日においても外国とのご交際は天皇皇后両陛下をはじめ皇族方のご公務のなかでも特に重要なものであり、天皇皇后両陛下は御即位の後、延べ18カ国を公的にご訪問され、御即位前を含めると通算45カ国を公式にご訪問された。その地域はアジアをはじめ、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカなど幅広い地域にわたり、各国との交流を深められている。今日、皇室の外国交際が盛んになる中で、大正10年と昭和46年の2度にわたる昭和天皇のヨーロッパご訪問は、現在に続く皇室の外国交際の道みちを拓かれた旅であったといっても過言ではあるまい。

当館では、昭和天皇ならびに香淳皇后が外国ご訪問やご慶

事の折、来日された賓客方よりお受けになられた品々を、過去の展覧会でそれぞれのテーマに基づいて紹介してきた。第10回展「海を渡ってきた贈り物」(平成8年1月)で金工品を特集し、第14回展「ヨーロッパの近代美術」(平成9年1月)では絵画作品を中心に紹介している。またアジアやアフリカ地域の作品を中心とした第20回展「民族のこころと形」(平成11年1月)では、それぞれの国に培われた造形的な特質のみられる作品の数々をまとめて展示した。当館に引き継がれたこれらの作品は、美術工芸品としての優れた造形、価値が認められるとともに、昭和天皇ならびに香淳皇后が国際親善の旅として他国の空のもとを歩まれたご足跡のみならず、その後の皇室の外国交際のひろがりの「礎いしづえ」を物語る品々なのである。

五味 聖 (ごみひかる / 当館学芸室研究員)

#### 参考文献

『宮内省省報』大正10年(1921)

『皇太子殿下海外御巡遊日誌』宮内大臣官房庶務課、大正12年(1923)

二荒芳徳『皇太子殿下御外遊記』大阪毎日新聞社、大正13年(1924)

『天皇皇后ヨーロッパご訪問記念写真集』毎日新聞社、昭和46年(1971)

天皇皇后両陛下御集『あけぼの集』木俣修編、読売新聞社、昭和49年(1974)

『皇后さま』主婦の友社、昭和59年(1984)

波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』草思社、平成10年(1998)

#### 昭和46年ヨーロッパご訪問の御製・御歌

##### 昭和天皇 御製四首

外国とくにの旅やすらげくあらしめとけふは来ている五十鈴の宮に  
外国の空の長旅ことなきはたづさはりし人のちからとぞ思ふ  
ヨーロッパの空はるばるとびにけりアルプスの峰は雲の上のみて  
アラスカの空に聳えて白じろとマツキンレーの山は雪のかがやく

##### 香淳皇后 御歌十八首より

(デンマーク)  
空港に出入りへませるデンマークの国王王妃に手をさしのべぬ  
(ベルギー・ブリュッセル王宮)  
さながらに古き絵に見る心地して王宮に入りぬ王妃とともに  
(イギリス)  
秋の日のまばゆきばかり光るなかいま華やかに馬車進みゆく  
(ドイツ)  
さはやかに風かよふドイツの秋の朝絵筆をとりぬ庭にたちつつ

図版・解説  
catalogue





背面部分

## 1 銀製花盛器

1898年頃  
ニエロ・金、銀  
32.8 × 32.8 × 36.5

明治31年(1898)、  
シャム国  
ラーマ5世 チュラロンコーン国王より

銀で成形した素地に、銀や銅、鉛、硫黄などを含む黒色の合金を象嵌し、細かな毛彫りを施して文様を表した花盛器で、表面全体は薄く金色に仕上げられている。この象嵌技法はニエロと呼ばれ、タイの金工技法の中でも特色あるもので、宮廷調度の装飾に多く用いられてきた。下部の器には花文と人物像を各面に配し、上部の各側面にタイ王室を象徴していると思われる三つの頭を持つ白象(エラワン)および傘蓋の図像と菊の御紋章が入れられ、タイ語と日本語による同意の銘文があり、日本語では次のように記されている「贈日本國皇帝睦仁陛下暹羅國皇帝チエラロンコルン暹羅國建國百十六年」。暹羅(シャム)とは日本で古くから用いられてきたタイ王国の呼称である。現在のタイ王国(バンコク王朝)が成立したのは1782年で、銘文にある建国116年は1898年にあたる。この年2月に「日暹羅修好通商航海条約」がバンコクで調印され、これに先立ち前年、明治30年にはタイに初めて公使館が開設された。『明治天皇紀』には、赴任する公使稲垣満次郎に託して、明治天皇からチュラロンコーン国王(在位1868~1910)に蒔絵料紙硯箱、七宝花瓶が贈られたことが記されており、本作品はこの答礼として、国王より贈られたものである。



2

## 花文蒟醬水入鉢

1932年頃  
蒟醬・漆塗  
各 D62.0、H58.5

昭和7年(1932)、  
シヤム国  
カンベンペット王子より

受台の上に鉢を据える形式の大型の水入れで、竹で編み上げた素地(籃胎)に漆を塗り、その外側に蒟醬(きんま)と呼ばれる技法で文様を表したもの。蒟醬とは漆塗りの上面に文様を線刻して、その凹みに色漆を充填して、さらに漆を塗ってから文様を研ぎ出す技法である。現在では、ミャンマーの蒟醬の影響を受けて、赤や黄、緑などの色漆を充填した華やかな作品が主流となっているが、本作品のように黒漆の上に朱漆を充填して花文様を表す手法は、タイ国内でも漆器産地として知られるチェンマイにおいて伝統的に行われてきたものである。花文様は花やつぼみを表した丸文を散らし、その間を埋めるように同じ花文様が施されている。

本作品は、伝来によればシヤム国(タイ王国)カンベンペット王子より、昭和7年にシヤム国において日本美術展覧会が開催された折に、その記念の品として昭和天皇に贈られた。カンベンペット王子はこれより以前に来日の経験もあり、昭和6年にはラーマ7世ブラチャーティポック国王が来日されるなど、タイ王室と日本の皇室の交流が深められた時期でもあった。



部分

### 3 紫天鵞絨地花文刺繡卓被

1888～89年頃  
刺繡・絹、金糸  
総 199.8 × 197.3

明治23年(1890)、  
トルコ皇帝アブデュル・ハミド2世より

天鵞絨地の中央には、皇室の御紋章を意識した菊花文を中心にして、薔薇とカーネーションを中心とした円形の花文様を、四周にも四角から中心に向かって広がる同様の文様を表し、周縁にルーミー文様と小花の唐草文様を廻らす。さらに縁飾りとして、糸を編んで成形した薔薇の花と葉を紐飾りと共に廻らしている。これらの装飾は総て金糸による豪華なもので、16世紀のオスマン・トルコの時代より行われてきた伝統的な宮廷刺繡である。本作品の刺繡は、厚紙による文様型紙をしつけ糸で止め、その上から金糸で包み込むように糸を刺していくディヴァル技法が用いられる。茎や葉は細い金糸を丹念に丁寧に刺し、花や実、葉の一部では平金を巻き付けた太い糸、螺旋状に巻いた糸など数種の糸を用いて、また花芯や主要な葉の葉脈部分にはスパンコールを用い、全体の表情に変化をつけている。その精緻な技術は、19世紀末のトルコ宮廷刺繡の最高水準によるものと言えよう。



この作品は、明治23年6月13日、トルコ国特派公使海軍少将侍中武官オスマン・パシヤがトルコ国皇帝の親書及びイムチャズ勲章を捧呈した際に、煙草器具等と共に贈られた品である。この使節は、明治20年に小松宮彰仁親王・同妃がヨーロッパ諸国を訪問された際、イスタンブールにてアブデュル・ハミド2世皇帝（在位1876～1909）に、明治天皇から贈られた勲章を親書と共に伝達されたその答礼使節であった。この卓被中央の菊花文は、おそらくは小松宮ご訪問の際に知り得た皇室の御紋章を強く意識したもので、日本の皇室に贈るために特別に製作されたものであろう。

無事に任を終えて軍艦エルトゥールル号で帰路についた使節であったが、和歌山県沖で暴風に遭遇して沈没、公使以下約600名の死者を出すことになった。地元の住民の尽力で69名が救助され、政府は彼らを日本の軍艦二隻に乗せて本国まで送り届けた。このことを契機に、両国の友好関係が始まったと言われる。





#### 4 ライオン狩り

20世紀初頭  
ローマンモザイク・ガラス、大理石  
47.0 × 75.0

大正13年(1924)、皇太子御成婚の折、  
ローマ教皇ピウス11世より

本作は、大正13年の皇太子御成婚の奉祝品として、第260代ローマ教皇ピウス11世(在位1922~39)から贈られたもので、おそらく、ローマ教皇庁内に設けられていたモザイク製作所で製作された品ではないかと推測される。

モザイク芸術は、古代ローマ時代から、とりわけ地中海世界各地で多彩な展開をみせてきた。その伝統を引き継いで、19世紀になるとローマでは、ガラス・モザイク技法による古代ローマの壁画をはじめとしたイタリア各期の名画の複製製作が盛んとなり、壁飾りや、モザイク画を嵌め込んだ精緻な宝飾品などが数多く生みだされた。馬に乗ったアラビアの人たちが銃を片手にライオン狩りをおこなうというエキゾチックな情景が躍動感豊かにあらわされた本作は、このような近代ローマン・モザイクの高度な技術を存分に発揮した、額装モザイク画の優品である。ライオン狩りは、古代オリエント以降、ヘレニズム期にかけてのレリーフ彫刻やモザイク画にしばしばみられたモチーフだが、19世紀にオリエンタリズムの潮流が高まりをみせるなかで、主としてラテン・ヨーロッパ圏の文学、美術の主題として再び流行したものであった。



5

オーギュスト・ロダン

### うちひしがれたカリアティード

(原題:Caryatid)

1880～81年

ブロンズ

22.0 × 25.0 × 43.0

大正10年(1921)、皇太子ご訪欧の折、  
パリ日本人会より

この女体像は、もともとは、フランス近代彫塑の巨匠であるロダン(1840～1917)の傑作《地獄の門》を構成する一部分であり、《地獄の門》では、門の正面向かって左側の柱頭上の壁龕内に配されている。肩に覆いかぶさる石の重みに永遠に耐えている女性の姿があらわされているが、このモチーフは、ロダンが自己の制作を通じて表現し続けた運命と闘う悲劇的な人間というテーマを、もっとも端的に造型化したものといえる。その後、本作は、《地獄の門》からは独立した単独の小像としても扱われ、鑄造されるようになった。

ここで紹介する一体は、大正10年の皇太子ご訪欧の折に、パリで「佛國巴里在留日本人會」から献上されたものである。当時、ロダンは、フランスのみならず日本においても、近代フランスの美術家のなかでもっともひろく名前が知られていたひとりであった。そのため、パリの日本人会では、皇太子のフランスご訪問を記念する献上品として、ロダンの作品を選ぶことになったものと考えられる。ジャマ部内側に「M.A.Rodin」の陽刻が、外側背面に作者のサインである「A.Rodin」と鑄造銘の「Alexis.Rudier/Fondeur.Paris」の陰刻が鑄出されているほか、ジャマ側部に「奉獻 佛國在留日本帝國臣民一同大正十年六月」との文字が刻まれている。





6

ジュール・クータン

### アテナ像

19世紀末～20世紀初頭

ブロンズ

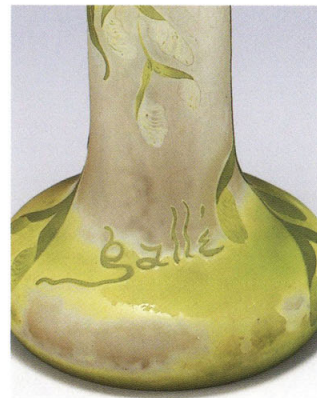
60.0 × 24.0 × 98.0

大正13年(1924)、

皇太子御成婚の折、内親王四方より

ギリシア神話に登場する知識と技術、芸術、そして戦いの女神であるアテナ（ローマ名はミネルバ）を有翼の姿であらわした本小像は、大正13年の皇太子御成婚の折に、内親王四方より献上されたものである。

作者のクータン(1848～1939)は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスにおけるネオ・バロック様式彫塑の第一人者として、ひろく知られている。パリのエコール・デ・ボーザールでアカデミックな古典主義的彫刻表現を学んだのち、1872年にローマ大賞を得てイタリアに留学し、帰国後は、国立図書館やオペラ・コミック劇場をはじめとする数々の公共建築を飾るブロンズ彫塑の制作に携わり、フランスの保守的彫刻界の重鎮としての名声を高めていった。また、1900年パリ万国博覧会では、出品作がグランプリを受賞している。



背面部分（サイン）

7

エミール・ガレ

### 植物文花瓶

1896～1904年頃  
ガラス・被せガラス、エッチング  
D12.8、H33.5

昭和46年（1971）、昭和天皇 香淳皇后  
ドイツ連邦共和国ご訪問の折、  
ラインラント＝プファルツ州首相より

エミール・ガレ（1846～1904）はフランスのアール・ヌーヴ期を代表する室内装飾家として、ガラス工芸を中心に、陶器、家具などの分野でも幅広い才能を発揮した。1889年と1900年のパリ万国博覧会でグランプリを受賞したほか、1902年のエミール・ルベ大統領のロシア訪問の際に公式贈答品の一つに選ばれるなど高い評価を得ていた。ドイツからガレの作品が贈られた真因は明らかではないが、ガレが初期にガラス製造の実習を行い、起業後も密接な関係を持っていたガラス製造工場の所在地、マイゼンタールが普仏戦争後にフランス領からドイツ領に組み込まれたことに由来しているのかもしれない。多種の植物を意匠化したガレであるが、本作に用いられているのは、葉や種子の形状からネグンドカエデと考えられ、また、サインなどから、本作はガレの生前にある程度量産された作品の一つと推測される。

昭和天皇の昭和46年のご訪欧で最後の公式ご訪問国となったのがドイツ連邦共和国であった。当地ではベートーヴェンの生家をご覧になったり、ライン河下りをお楽しみになったが、同行取材記事によれば、ドイツ国民の歓迎振りは格別であり、皇室に対する親愛の情の強いことがうかがわれる。



8

C. ピアン (絵付デザイン)、  
国立セーブル製陶所

### 菊銀杏文花瓶

1908 年  
陶磁  
各 D40.0、H65.0

大正 13 年 (1924)、皇太子御成婚の折、  
フランス共和国大統領より

大正 13 年の皇太子御成婚の御慶事をお祝いしてフランスのミラン大統領 (在職 1920~24) から贈られたものである。大正 10 年のご訪欧の際に、歓迎の午餐を主催されたのも同大統領であった。その際に贈られた出品番号 9 の《白熊図花瓶》と同じく、この機会にも大統領より皇室への贈進品として国立セーブル製陶所の製品が選ばれたことは、フランスにおける同製陶所の位置付けの高さを物語っている。国立セーブル製陶所は、18 世紀中葉に当初ヴァンセンスで創業開始したが、後援者ボンパドゥール夫人の提言を受けてセーブルへ移転し、国王の支援により王立製陶所となった。フランス革命後の第一共和制の下で国有化され現在に至っている。

本作は色づき重なり合う銀杏の葉の上に咲き乱れる小菊を配し、花瓶の底部と接合された置台には松笠をモチーフとした装飾があしらわれ、全体に秋を象徴する意匠でまとめられている。あえて菊が描かれた花瓶を選ばれたのは、皇室への贈り物という配慮に基づいてのことだったのではないだろうか。淡い色調や様式的な植物文様の配置、置台の鋭角的な形状など、その後のアール・デコ様式に共通する要素を併せ持つ作品である。



9

オラス・ビューヴィル(絵付デザイン)、  
国立セーブル製陶所

### 白熊図花瓶

1920年  
陶磁

D18.5、H45.5

大正10年(1921)、皇太子ご訪欧の折、  
フランス共和国大統領より

大正10年の皇太子のご訪欧では、イギリスの次にフランスを訪問され、ルーブル美術館やエッフェル塔、ナポレオンの史跡などをご覧になった。その後、ベルギーとオランダにお立ち寄りになり、再びフランスへと戻られて、アルザス・ロレーヌ地方、ヴェルダンの戦跡などをご巡覧ののち、パリで自由なひとときをお過ごしになった。6月1日には、ミラン大統領主催の歓迎午餐会が行われた。皇太子は大正天皇からお預かりした菊花大綬章を大統領へご贈進になったが、本作はその際に大統領より贈られたものである。

本作は、群青色の器面に白土を盛り上げてレリーフ状に白熊を表し、首部の氷柱風の文様とともに北極の寒々とした雰囲気を与えている。胴部の上へと伸張する植物文様や金彩の用い方には、数年後に欧米を中心に世界的な広まりをみせるアール・デコ様式への志向がみられる。その斬新なデザインは、製作当時のフランス美術工芸の特徴を色濃く示している。



背面部分 (サイン)



ロベール・ボンフィス（原画）、  
国立ゴブラン製作所

### ゴブラン織扇形衝立

1918 年  
ゴブラン織・毛  
総 109.0 × 113.5  
ゴブラン織扇面約 76.0 × 101.5

大正 14 年（1925）、大正天皇 大婚 25 年の折、  
フランス共和国大統領より

明治期以降、積極的に外国との交際を行われた皇室は、諸外国の王室や首脳に対して、慶事を始め、事ある毎に皇族や大使等を遣わしたり、あるいは打電などの方法によって、心細やかな配慮を図られている。そうした皇室の御慶事に対して、諸外国からは様々な品が贈られていた。本作品は、大正天皇大婚 25 年のお祝いの品として、時のフランス共和国大統領、ガストン・ドゥメルグ（在職 1924～31）より両陛下に贈られた品である。フランスは、朝香宮鳩彦王をはじめ、皇族方が親しみを持たれた国の一つであった。

この衝立は、中央扇面には星空の下で戯れる男女を織り表す優美なゴブラン織を、中央要部分に花盛器に飾った薔薇や鈴蘭等を彫刻した木枠に嵌め込むアール・デコ様式初期の作品である。ゴブラン織は、フランスの美術品を代表するものであり、13 世紀中頃には既にパリでの生産が盛んになっていた。15 世紀にはゴブラン一族が活躍するが、彼らによる作業所等を統合して、ルイ 14 世の蔵相コルベールの尽力によって 1662 年にパリにタビスリー製作所が設立され、以降、王室の調度品製作を担うなど、その中心となって発展し、現在もフランス政府の補助を受けて伝統的な技術によって製作を続けている。

ゴブラン織部分のデザインは、画家であり装飾美術家としてアール・デコ期に活躍したロベール・ボンフィス（1886～1971）の早い時期、エティエンヌ芸術学校の教授に就任する前年の作品にあたる。



11

ボリス・クストージェフ

## ボルガ河畔の乙女

1916年  
油彩・カンヴァス  
210.0 × 239.0

昭和3年(1928)、御大礼の折、  
ソビエト社会主義共和国連邦より

1878年に生まれたクストージェフは郷里のアストラハンで美術を学びはじめ、その後、サンクト・ペテルブルクの美術学校でリアリズム画家のイリヤ・レービンらに師事したのち、フランスやスペインに留学した近代ロシアの画家で、1904年に〈新美術家協会〉設立に参加したほか、〈芸術世界〉や〈ロシア美術家同盟〉、グループ〈16〉の会員にも名を連ねた。その作風は、当初は師のレービンゆずりの写実的性格が色濃いものであったが、やがて、民話や素朴なロシアの風俗を主な画題として、単純化した形態と明朗な色彩、一種演劇的な構図を特色とする民族色豊かで装飾美にあふれる独自の絵画世界を描きあらわすようになった。1927年に死去した。

《ボルガ河畔の乙女》は、1917年の十月革命によるソビエト社会主義共和国連邦樹立の前年に描かれた、クストージェフの円熟期の代表作で、彼の作風を典型的に示す一点として、ひろく知られている。昭和3年に旧ソビエト社会主義共和国連邦政府から、昭和天皇の御大礼奉祝品として贈られた品である。



12

エードヴァルド・ハルド(デザイン)、  
オレフオッシュ・ガラス工場

### 蓋付壺

1923 年頃  
ガラス・エングレーヴィング  
D25.0、H44.5

大正 13 年(1924)、  
皇太子御成婚の折、  
スウェーデン国王グスタフ 5 世  
より

13

エードヴァルド・ハルド(デザイン)、  
オレフオッシュ・ガラス工場

### 蓋付壺

1920 年代前半  
ガラス・エングレーヴィング  
D21.0、H39.5

大正 15 年(1926)、来日の  
スウェーデン国皇太子同妃より

出品番号 12 はスウェーデン国王グスタフ 5 世(在位 1907～50)から、大正 13 年の皇太子御成婚を祝福して贈られたものである。一方、出品番号 13 は大正 15 年、スウェーデンのグスタフ・アドルフ皇太子・ルイズ妃が来日された際に皇太子に贈られ、のちに秩父宮家へ御下賜になったものである。その答礼として、大正天皇よりアドルフ皇太子へ清水六兵衛作の花瓶、貞明皇后よりルイズ妃へ菊模様入りの屏風が贈られた。

エードヴァルド・ハルド(1883～1980)はパリで画家を志していたが、1917 年にオレフオッシュ・ガラス工場のデザイナーとして加わると、1920 年代には世界的な評価を得るガラス作品の製作にたずさわった。その当時に制作された両作品は、ハルドのデザインに基づいて、優れた職人の手による極めて精緻なエングレーヴィング技法により、王家の紋章を中心とした優美な加飾がなされたもので、スウェーデンにおけるガラス工芸の芸術性の高さがうかがわれる。





15

14

ユベール・フアルジュ (デザイン)、  
ヴァル・サン・ランベール・  
ガラス工場

### 赤被せガラス花盛器

1923 年頃  
ガラス・被せガラス、カット  
D36.0、H39.0

大正 13 年 (1924)、  
皇太子御成婚の折、  
ベルギー国王アルベール1世より

15

ヴァル・サン・ランベール・  
ガラス工場

### 赤被せガラス花瓶

1928 年頃  
ガラス・被せガラス、カット  
D24.5、H56.5

昭和 3 年 (1928)、  
御大札の折、  
ベルギー国王アルベール1世より

ベルギー国王アルベール1世 (在位:1909~34) は、大正10年の皇太子のご訪欧の際に、ベルギーにお立ち寄りになった皇太子をお迎えして歓迎の晩餐を催され、親睦を深められた。出品番号14、15は、それからほどなく挙行された皇太子御成婚、御大札の際に、国王が贈られたベルギーの美術工芸を代表する最高水準のクリスタル・ガラスである。

ヴァル・サン・ランベール・ガラス工場は1825年に創業し、当初はネーデルランド国王ウィリアム1世、ベルギー独立後はベルギー国王レオポルド1世の後援を得て、フランスとベルギーの中小のガラス工場を吸収し、1880年頃にはベルギー最大のガラス製造会社に成長した。1890年代になると、同国内のアール・ヌーヴォーの流行を受けて、数々のデザイナーによるガラス作品の制作を開始した。両作品とも、赤色ガラスを被せた器体に深くかつ密にほどこされたカットが鮮やかで、当時、世界を席卷していた同工場の技術の高さをよく示している。ユベール・フアルジュはアール・デコ期に活躍したデザイナーである。



16

ボリス・カーリン

### 本を持つ少女

1968年頃

大理石

46.0 × 29.5 × 64.5

昭和43年(1968)、国賓として来日の  
ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国  
大統領より

この大理石像は、昭和43年に国賓として来日した旧ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の大統領ヨシップ・ティトー(在職1953~80)より昭和天皇に贈られた品である。

1905年生まれのカーリンは、20世紀ユーゴスラヴィアのアカデミズム彫刻界の中心的な存在として、長く活躍した作家であった。とりわけ記念像の制作に優れた技量を発揮し、国内各地の公園や広場に大小さまざまなモニュメント像を残した。また、教育者として、ユーゴスラヴィアやスロヴェニアで多くの優秀な後身を育成したことでも知られている。

本作は小品ながらも、カーリンの新古典主義的な作風をよく示している秀作で、本を手にしつつ物思いにふける少女の裸体像が、端整な造型感覚のもとで、優美かつ実在感豊かにあらわされている。

17

ジャン・ヴァンノーテン (原画)、  
シャドワール工房

## 草花文様壁掛

1971 年頃  
ゴブラン織・毛  
223.0 × 150.0

昭和 46 年 (1971)、昭和天皇 香淳皇后  
ベルギー王国ご訪問の折、  
国王ボードワン 1 世・王妃より

昭和天皇が天皇として歴史上初めて外国を公式訪問されたのが、昭和 46 年のご訪欧で、その最初の公式訪問国がベルギーである。本作品は、当時の国王・ボードワン 1 世 (在位 1951 ~ 93) とファビオラ王妃から昭和天皇、香淳皇后に贈られたもので、白地に極楽鳥花を中心とした草花を鮮やかな色彩で織り表した現代タペストリーである。原画は、ブリュッセル王立美術アカデミーの出身で、米国を中心にタペストリーのデザイナーとして国内外で活躍したジャン・ヴァンノーテン (1903 ~ 82)、また制作は、1980 年頃までブリュッセルで活動していたシャドワール工房による。

ベルギーのタペストリーは、14 ~ 15 世紀に、フランス上流貴族の注文を受けて発達し、トゥルネーやブリュッセルを中心に発展していった。その後もブリュッセルを中心にその生産は活発で、画家による下絵をもとにした優品も数多く製作され、宮殿や寺院等の室内装飾として用いられた。わが国にも既に 16 世紀のブリュッセルの綴織が舶載し、京都や大津、長浜の曳山飾りの胴掛等に用いられて、華やかな祭りを盛り上げていた。ベルギーのタペストリー製作は、1889 年に設立されたメッヘレンの王立ドゥ・ウィット・タペストリー工房をはじめとして今なお盛んで、その一方では古い作品を修復して保存するための施設も充実している。



18

ギユスターヴ・カミュ

## 南風

(原題: Le Vent du Sud)

1971年  
油彩・カンヴァス  
112.7 × 144.7

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后  
ベルギー王国ご訪問の折、シャルルロワ市より

ベルギー南部のハイノーで1914年に生まれたカミュは、ブリュッセル近郊のシャルルロワ工業学校で素描と彫刻の基礎を学んだのち、美術大学時代から本格的に絵画制作に取り組むようになり、やがて1930年代から50年代初頭にかけて、国内の美術界で幅ひろく活躍して数々の受賞を重ねたほか、パリやローマでも研鑽に励んだ。その後、1976年にいたるまでモンスの美術学校で絵画と素描の教授をつとめ、長く後身の指導にもあたった。その画風は、当初は印象主義の摂取からはじまり、ついでフォーヴィスム、さらにはキュビスムの受容とめまぐるしく変転していったが、その後、フォーヴィスムとキュビスムを折衷した、躍動感あふれる独自の具象絵画様式を確立し、人物画、風景画、静物画、タペストリーの原画などのさまざまな分野で旺盛な制作活動を展開し続けた。1984年に死去した。

本作は、こうしたカミュの最円熟期の作風をよく示す一点で、昭和46年のご訪欧の折に、シャルルロワ市から贈られた品である。

19

フィン・リンゴー

## 四季

(原題: De Fire Årstider)

1981年

ガラス・色ガラス熔着

D14.2 ~ 14.7, H14.2 ~ 15.0

昭和56年(1981)、国賓として来日の  
デンマーク国女王マルグレーテ2世陛下・  
王配ヘンリック殿下より

1972年に即位されたデンマーク国女王マルグレーテ2世陛下は、昭和38年の訪日以来、今日まで、5度にわたって訪日され、その度ごとに皇室との友好関係を築いてこられた。本作は女王に即位後初めて、昭和56年に国賓として訪日の際に皇室へ贈られたものである。

フィン・リンゴー(1930~)はデンマークのコペンハーゲン王立芸術大学絵画科および同大学陶芸科に学び、陶芸作家として活動した後にガラス作家へと転向した。作家活動のほか、1975年にはコペンハーゲンで国際的な現代ガラス展の開催に尽力するなど、現代ガラスの分野ではデンマークのみならずヨーロッパにおける先駆的な役割を果たした点でも、高い評価を得ている。また、国内でのガラス振興にも力を注ぎ、1985年に自身の工房のあるデンマークのエーベルトフトにガラス工芸専門の美術館を設立した。本作は、色ガラスを何層にも重ねてデンマークの四季折々の風景をモチーフに色彩豊かに表し、造型性よりも詩的なイメージや絵画性を重視していた、1980年代のフィン・リンゴーらしい作風がうかがわれる。



20

ハーデラン・ガラス工場

## 白熊

1983年頃  
クリスタルガラス  
24.5 × 41.6 × 23.0

昭和58年(1983)、国賓として来日の  
ノルウェー国王オラフ5世より

昭和58年に国賓として訪日されたノルウェー王国・国王オラフ5世(在位1957~91)より、昭和天皇へ贈られた品である。本作は氷塊の上に佇む親子の白熊をモチーフとしたもので、純度の高いクリスタルガラスの光沢、透明感を活かした作品である。本土の北半分が北極圏内にあるノルウェーでは、その一部に野生の白熊が生息する地域もあり、まさに風土に根ざしたモチーフから生み出された作であると言えよう。ハーデラン・ガラス工場は18世紀中葉に国王クリスチャン6世により設立された。1824年に個人企業に売却され、1850年代には透明ガラスや食卓用ガラス製品が製作されるようになった。1929年に初の専属デザイナーを迎えてデザイン発展の基礎を築き、1930年代から40年代にかけて各種の機械設備を導入して技術革新を図った。現在は北欧を代表するガラス製造会社の一つであり、しばしばノルウェー王室の贈答品として用いられている。

21

ジャンヌ・グリュウ（原型）、  
ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所

ブルー・フィッシュ

（原題：Blue Fish-Coelacanth）

1971年頃

陶磁

55.5 × 110.0 × 18.5

昭和46年（1971）、昭和天皇 香淳皇后  
ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所をご訪問  
の折、同所より

昭和天皇の昭和46年のご訪欧では、米国アンカレッジを経由して、まず最初にデンマークにお立ち寄りになった。ご滞在先のコペンハーゲンでは、ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所をご訪問になり、絵付け作業の工程などをご覧になった。本作はその際に同製作所より贈られたものである。

本作はロイヤル・コペンハーゲンの写実的なフィギュリン（磁器人形）の系譜に連なるもので、彫塑家のジャンヌ・グリュウ（1927～）による塑造をもとに1963年より継続して製作されている。1775年に開窯したロイヤル・コペンハーゲンでは、その操業初期からフィギュリンが作られており、人物像や愛らしい小動物をかたどったものばかりでなく、海洋国らしく魚類をモチーフにした作品もみられる。本作のモチーフとなったシーラカンスは、1938年と1955年にアフリカのコモロ諸島沖で発見され、「生きた化石」と呼ばれて世界的に注目を集めた。生物学の研究を専門とされていた昭和天皇に相応しい贈り物であったのではないだろうか。



22

ウンベルト・ペラサ

## 牛 追 い

1978年頃

ブロンズ

98.0 × 28.0 × 31.0

昭和53年(1978)、国賓として来日の  
メキシコ合衆国大統領より

本作は、昭和53年に国賓として訪日されたメキシコのポルティエヨ大統領(在職1976~82)から昭和天皇に贈られた品である。

作者のペラサは、1925年生まれ、メキシコを代表する具象彫刻家のひとり、メキシコ国立造形芸術学校在学中から旺盛な制作活動を展開させて、内外で高い評価を受け続けてきた。また、メキシコ国立自治大学などで長く後進の指導にもあたった。ペラサは、本作にみられるように、牛飼いや闘牛の情景を主題とした制作を好んでおこなったが、その一方では、公共施設のモニュメント像や噴水、メキシコ連邦議会図書館内に設置された胸像群をはじめとする肖像彫刻の制作を数多く手がけていることでも知られている。



23

### 金細工ハンドバック

1956年頃

金

15.5 × 11.5

昭和31年(1956)、国賓として来日のエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ1世より

金の細線を用いて、緻密に唐草や花の文様を表したハンドバック。透かし文様の下には紅色のビロードが貼られ、金色が引き立てられている。表側中央には、王冠と文字をデザインした紋章が配されている。このハンドバックの他、金銀線を用いて同じ手法で作られた《果実盛鉢》(当館蔵)も同時に贈られており、エチオピアの金工技術の高さが示されている。

エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ1世(在位1930~74)の訪日は、戦後初の国賓として迎えられた。伝来によれば、帰国を前に行われたお別れの午餐の折、皇帝がお手ずから香淳皇后に贈られた品である。

24

### 銀製白粉入

1963年頃

銀

11.5 × 11.5 × 12.0

昭和38年(1963)、国賓として来日のタイ国王プミボン陛下・王妃シリキット陛下より

蓮花や仏塔、舍利容器などの形を取り入れてデザインされた銀製白粉入で、上部に金色に輝く4層の傘蓋を乗せ、4枚の蓮弁が器の立ち上がりを支える形をしている。傘蓋の部分にはガラスが嵌込まれており、蓮弁部分はタイに伝統的な象嵌技法、ニエロ細工が施されている。昭和38年、国賓として来日された国王ラーマ9世プミボン陛下・王妃シリキット陛下より、香淳皇后へ贈られた品。





25

## 貝細工扇子

1972年頃  
貝細工・紙本彩色  
26.5 × 51.4

昭和47年(1972)、公賓として来日の  
スペイン国ホアン・カルロス同妃両殿下より

本作品は庭園に集い語らう上流階級の男女の雅な姿を描いた、18世紀のスペイン宮廷文化の香りを伝える扇子である。貝の真珠層による16本の骨で構成されており、骨の部分は文様を透かし彫りで表わし、要部分はガラスが嵌め込まれた金属の飾りを付ける。スペイン国ホアン・カルロス同妃両殿下(現国王・王妃両陛下)より香淳皇后に贈られた品である。

団扇とは違って、コンパクトに折り畳むことができる扇子は、もとは日本で成立したもので、檜の薄板をつなぎあわせた檜扇と、かわほりと称される紙扇の2種類の扇が平安時代の宮中装束には欠かすことの出来ない服飾品のひとつとなった。これが13世紀頃に中国へ伝えられ、16世紀に中国からインド、スペインを通じてヨーロッパに伝播された。ヨーロッパでは17世紀頃より工芸技術の粋を尽くした優美な扇が作られるようになり、アクセサリーとしてばかりでなく、扇を使った特定のしぐさで相手に想いを伝える「扇ことば」が発達するなど、18世紀のヨーロッパ宮廷の女性たちにとって扇子はなくてはならないものであった。

## アメジスト香箱

1963年頃  
アメジスト、金  
6.0 × 6.8 × 4.3

昭和38年(1963)、国賓として来日の  
オランダ国王女ベアトリックス殿下より



アメジストを箱形に削りぬき成形した香箱で、蓋表には古代神話をモチーフとした金のレリーフが嵌め込まれ、縁にはやはり金で装飾が施されている。18世紀頃よりオラニエーナサウワ家(現在のオランダ王室)で用いられ、今日伝えられている小箱類に、嗅ぎタバコ入れがある。たとえば、アメジストを犬の形につくり、宝石を嵌めて金銀の細工装飾したものや、木製の小箱で螺鈿を施したものなどが含まれており、この香箱も王室で好まれた嗅ぎタバコ入れの装飾の伝統を引き継ぐものであろう。昭和38年にオランダ国王女ベアトリックス殿下(現女王陛下)より香淳皇后へ贈られた品である。

ガラード社

## 銀製小箱

1971年頃  
銀  
8.7 × 9.0 × 4.0

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后  
英国ご訪問の折、エリザベス皇太后より

イギリスをご訪問の折、記念の品としてエリザベス皇太后より香淳皇后に贈られた銀製小箱。蓋表には、レリーフ状にエリザベス皇太后の御紋章が表され、その獅子の頭上にはイングランドとスコットランドをそれぞれ象徴するバラとアザミの花が配されている。箱の内部には小さなガラス製のインク壺と海綿が納められており、文具としての用途を備えた小箱である。

制作したガラード社は、1735年の創立。1843年にヴィクトリア女王より御用達の宝石商として任命を受けて以来、現在に至るまでジュエリー、銀器の分野で英国王室御用達(ロイヤル・ワラント)の認定を保持し続けている。







28

### ブローチ

1966年頃  
テクタイト、ダイヤ、金  
10.0 × 5.6 × 3.1

昭和41年(1966)、国賓として来日の  
フィリピン共和国大統領より



29

アンドリュウ・グリマ

### ブローチ

1971年頃  
ダイヤ、金  
6.8 × 6.7 × 1.3

昭和46年(1971)、昭和天皇 香淳皇后  
英国ご訪問の折、  
英国女王エリザベス2世陛下より

30

### ブローチ

1984年頃  
ヒスイ、パール、金  
4.9 × 4.7 × 2.0

昭和59年(1984)、国賓として来日の  
ビルマ連邦社会主義共和国大統領より

挿図- 1

これら3点のブローチは平成13年に三の丸尚蔵館に引き継がれた香淳皇后の御遺品である。各国からの贈り物には宝飾品も多く選ばれており、その地に産出する貴金属や宝石を用いたものも含まれる。例えば、フィリピンからの木の実形のブローチ(出品番号28)には、フィリピンに産するガラス質の隕石、テクタイトがひとつ付けられている。ブローチ(出品番号30)は、中央にハート形の真珠が置かれ、周囲にミャンマーに特産のヒスイがちりばめられている。このほか、放射状に金の線をデザインした台にダイヤモンドをちりばめたブローチ(出品番号29)は、昭和46年の英国ご訪問の折に、女王エリザベス2世陛下より贈られたもので、その中央には、女王陛下治世を表す「ER II」の文字が取り付けられている。作品に記された刻印から、英国王室御用達のジュエリーデザイナー、アンドリュー・グリマの作品であることが知られる。

香淳皇后は、通常は真珠のネックレスやイヤリングを用いられる

ことが多かったようであるが、これらの各国から贈られた様々な宝石やデザインによるブローチを装いに合わせてお着けになっていたことが数々の御写真からうかがえる。またご日常のほか、英国女王エリザベス2世陛下が昭和50年に来日された折、お出迎えの際にはブローチ(出品番号29)をお着けになるといったご配慮を示されていた。

挿図-ブローチを御着装の御写真

- 1 昭和51年10月吹上御苑内を散策される昭和天皇 香淳皇后。  
(出品番号28のブローチ)
- 2 昭和49年1月金婚式をお迎えになって。  
(出品番号29のブローチ)
- 3 昭和60年82歳のお誕生日、画帖《瑞彩》(当館蔵)を御覧に。  
(出品番号30のブローチ)

大正 10 年 (1921) 皇太子裕仁親王 ヨーロッパ諸国ご訪問

\*は関連作品

- 3 月 3 日 横浜発、御召艦「香取」随艦「鹿島」。
- 3 月 10 日 香港着。
- 3 月 18 日 シンガポール着。
- 3 月 28 日 コロンボ着。
- 4 月 15 日 スエズ着。
- 4 月 18 日 カイロ着。【エジプト国ご訪問】ピラミッド御視察。
- 4 月 19 日 博物館御視察。
- 5 月 9 日 ボーツマス着。【イギリス国ご訪問】同日、ロンドン着。バッキンガム宮殿にて公式晩餐会、同宮殿に御滞在。
- 5 月 12 日 ナショナルギャラリー御視察。
- 5 月 13 日 大英博物館御視察。
- 5 月 14 日 オックスフォード大学御訪問。  
デリー劇場にて「シビル」御観劇。
- 5 月 16 日 グリニッジ天文台御視察。
- 5 月 18 日 ケンブリッジ大学ご訪問。名誉法学博士の学位を授与される。
- 5 月 30 日 ボーツマス発、ル・アーブル着。【フランス国ご訪問】
- 6 月 1 日 エリゼ宮にて大統領主催の午餐。

\*出品番号 9 白熊図花瓶

\*出品番号 5 うちひしがれたカリアティード

- 6 月 3 日 ルーブル美術館御視察。
- 6 月 6 日 オデオン劇場にて大統領と「マクベス」御観劇。
- 6 月 8 日 ベルサイユ宮殿御視察。オペラ座「アイダ」御観劇。
- 6 月 10 日 パリ発、ブリュッセル着。【ベルギー国ご訪問】同日、公式晩餐会。
- 6 月 14 日 アントワープ着、ノートルダムにてルーベンスの祭壇画を御覧。
- 6 月 15 日 アントワープ発、アムステルダム着。【オランダ国ご訪問】公式晩餐会。
- 6 月 16 日 アムステルダム国立美術館にてレンブラントの「夜警」を御覧。
- 6 月 17 日 ハーグ平和宮御視察。
- 6 月 20 日 ベルギー経由、パリ着。【フランス国ご滞在】
- 6 月 22 日 国立セーブル製陶所御視察。
- 6 月 27 日 スペイン大使館へ、訪仏中のスペイン国王アルフォンソ 13 世をご訪問。
- 7 月 7 日 パリ発、リヨン、マルセイユ経由トゥーロン着。
- 7 月 11 日 ナポリ着。【イタリア国ご訪問】
- 7 月 12 日 ナポリ発、ローマ着。公式晩餐会。
- 7 月 13 日 ナチオナーレでの美術展覧会御覧、作品お買上げ。ボルゲーゼ美術館など御視察。
- 7 月 14 日 ローマ古代遺跡御視察。
- 7 月 15 日 【バチカン市国ご訪問】ローマ教皇と御会見。  
サンピエトロ聖堂、御視察。
- 7 月 16 日 訪伊中のチェコスロバキア大統領と御会見。教皇庁博物館、モザイク製作所御視察。
- 7 月 17 日 ローマ発、ナポリ着。
- 7 月 18 日 ボンベイ御視察。ナポリ発。
- 7 月 24 日 スエズ着。
- 7 月 30 日 アデン着。
- 8 月 9 日 コロンボ着。
- 9 月 3 日 横浜着。

昭和 46 年 (1971) 昭和天皇 香淳皇后 ヨーロッパ諸国ご訪問

\*は関連作品

- 9 月 27 日 御出発。
- 9 月 26 日 米国アンカレッジ着、米国大統領同夫人と御会見。
- 9 月 27 日 コペンハーゲン着。【デンマーク国お立寄り】
- 9 月 28 日 陶器工場(ロイヤル・コペンハーゲン)、人魚の像御視察。

\*出品番号 21 ブルー・フィッシュ

- フリースデンスボー宮殿にて午餐。
- 9 月 29 日 ブリュッセル着。【ベルギー国公式ご訪問】  
ラーケン王宮にて公式晩餐会。

\*出品番号 18 草花文壁掛

- 9 月 30 日 アントワープ市、カテドラルにてルーベンスの祭壇画御覧。
- 10 月 1 日 ワーテルロー、シャルルロワ市、市庁舎、美術館ご訪問。

\*出品番号 17 南風

- 10 月 2 日 パリ着。【フランス国お立寄り】エリゼ宮にて大統領主催の午餐。  
ノートルダム寺院御覧。サント・シャベルでステンドグラス御覧。
- 10 月 3 日 ルーブル美術館御視察、フォンテンブロー宮殿御散策。
- 10 月 4 日 ヴェルサイユ宮殿、小トリアノン宮御視察。
- 10 月 5 日 ロンドン着。【英国公式ご訪問】公式晩餐会。

\*出品番号 27 銀製小箱

\*出品番号 29 ブローチ

- 10 月 6 日 ロイヤルソサイエティー、王立植物園、ギルドホールにてロンドン市主催の歓迎晩餐会。
- 10 月 7 日 リンネ協会、ロンドン動物学協会。
- 10 月 8 日 アムステルダム着。【オランダ国お立寄り】
- 10 月 9 日 国立美術館御視察、スーストダイク宮殿にて午餐。
- 10 月 10 日 ジュネーヴ着。【スイス国お立寄り】
- 10 月 11 日 ボン着。【ドイツ国公式ご訪問】ブリュール城にて公式晩餐会。

\*出品番号 7 植物文花瓶

- 10 月 12 日 ライン河下り、ローマ時代遺跡御視察。
- 10 月 13 日 ベートーベン生家御視察ほか。
- 10 月 14 日 アンカレッジ経由、御帰国。

出品目録

作品番号	作者	作品名	員数	制作年代	技法・材質 サイズ (cm)	伝来
1		銀製花盛器	1点	1898年頃	ニエロ・金、銀 32.8 × 32.8 × 36.5	明治31年(1898) シヤム国 ラーマ5世チュラロンコーン国王より
2		花文蒔醬水入鉢	1対	1932年頃	蒔醬・漆塗 D62.0、H58.5	昭和7年(1932) シヤム国 カンペンベット王子より
3		紫天鷲絨地花文 刺繡卓被	1点	1888～ 89年頃	刺繡・絹、金糸 総199.8 × 197.3	明治23年(1890) トルコ皇帝アブデュル・ハミル2世より
4		ライオン狩り	1点	20世紀初頭	ローマンモザイクガラス、大理石 47.0 × 75.0	大正13年(1924) 皇太子御成婚の折、 ローマ教皇ピウス11世より
5	オーギュスト・ロダン	うちひしがれたカリアティード (原題:Caryatid)	1点	1880～ 81年	ブロンズ 22.0 × 25.0 × 43.0	大正10年(1921) 皇太子ご訪欧の折、 パリ日本人会より
6	ジュール・クータン	アテナ像	1点	19世紀末～ 20世紀初頭	ブロンズ 60.0 × 24.0 × 98.0	大正13年(1924) 皇太子御成婚の折、 内親王四方より
7	エミール・ガレ	植物文花瓶	1点	1896～ 1904年頃	ガラス・被せガラス、エッチング D12.8、H33.5	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 ドイツ連邦共和国ご訪問の折、 ラインラント＝プファルツ州首相より
8	C.ピアン(絵付デザイン) / 国立セーブル製陶所	菊銀杏文花瓶	1対	1908年	陶磁 各D40.0、H65.0	大正13年(1924) 皇太子御成婚の折、 フランス共和国大統領より
9	オラス・ビューヴィル(絵付デザイン) / 国立セーブル製陶所	白熊図花瓶	1点	1920年	陶磁 D18.5、H45.5	大正10年(1921) 皇太子ご訪欧の折、 フランス共和国大統領より
10	ロベール・ボンフィス(原画) / 国立ゴブラン製作所	ゴブラン織扇形衝立	1点	1918年	ゴブラン織・毛 総109.0 × 113.5 ゴブラン織扇面約76.0 × 101.5	大正14年(1925) 大正天皇大婚25年の折、 フランス共和国大統領より
11	ボリス・クストージェフ	ボルガ河畔の乙女	1点	1916年	油彩・カンヴァス 210.0 × 239.0	昭和3年(1928) 御大礼の折、 ソビエト社会主義共和国連邦より
12	エードヴァルド・ハルド(デザイン) / オレフオッシュ・ガラス工場	蓋付壺	1点	1923年頃	ガラス・エングレーヴィング D25.0、H44.5	大正13年(1924) 皇太子御成婚の折、 スウェーデン国王グスタフ5世より
13	エードヴァルド・ハルド(デザイン) / オレフオッシュ・ガラス工場	蓋付壺	1点	1920年代 前半	ガラス・エングレーヴィング D21.0、H39.5	大正15年(1926) 来日の スウェーデン国皇太子同妃より
14	ユベール・ファルジュ(デザイン) / ヴァル・サン・ランペール・ガラス工場	赤被せガラス花盛器	1点	1923年頃	ガラス・被せガラス、カット D36.0、H39.0	大正13年(1924) 皇太子御成婚の折、 ベルギー国王アルベール1世より
15	ヴァル・サン・ランペール・ガラス工場	赤被せガラス花瓶	1点	1928年頃	ガラス・被せガラス、カット D24.5、H56.5	昭和3年(1928) 御大礼の折、 ベルギー国王アルベール1世より
16	ボリス・カーリン	本を持つ少女	1点	1968年頃	大理石 46.0 × 29.5 × 64.5	昭和43年(1968) 国賓として来日のユーゴスラヴィア 社会主義連邦共和国大統領より
17	ジャン・ヴァンノーテン(原画) / シャドワール工房	草花文様壁掛	1点	1971年頃	ゴブラン織・毛 223.0 × 150.0	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 ベルギー王国 ご訪問の折、国王ボードワン1世・王妃より
18	ギュスターヴ・カミュ	南風 (原題:Le Vent du Sud)	1点	1971年	油彩・カンヴァス 112.7 × 144.7	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 ベルギー王国 ご訪問の折、シャルロワ市より
19	フィン・リンゴー	四季 (原題:De Fire Årstider)	4点	1981年	ガラス・色ガラス熔着 D14.2～14.7、H14.2～15.0	昭和56年(1981) 国賓として来日のデンマーク国女 王マルグレーテ2世陛下・王妃ヘンリック殿下より
20	ハーデラン・ガラス工場	白熊	1点	1983年頃	クリスタルガラス 24.5 × 41.6 × 23.0	昭和58年(1983) 国賓として来日の ノルウェー国王オラフ5世より
21	ジャンス・グリュエ(原型) / ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所	ブルー・フィッシュ (原題:Blue Fish-The Coelacanth)	1点	1971年頃	陶磁 55.5 × 110.0 × 18.5	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 ロイヤル・コ ペンハーゲン磁器製作所ご訪問の折、同所より
22	ウンベルト・ベラサ	牛追い	1点	1978年頃	ブロンズ 98.0 × 28.0 × 31.0	昭和53年(1978) 国賓として来日の メキシコ合衆国大統領より
23		金細工ハンドバック	1点	1956年頃	金 15.5 × 11.5	昭和31年(1956) 国賓として来日の エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ1世より
24		銀製白粉入	1点	1963年頃	銀 11.5 × 11.5 × 12.0	昭和38年(1963) 国賓として来日のタイ国王プミボ ン陛下・王妃シリキット陛下より
25		貝細工扇子	1点	1972年頃	貝細工・紙本彩色 26.5 × 51.4	昭和47年(1972) 公賓として来日の スペイン国ホアン・カルロス同妃両殿下より
26		アメジスト香箱	1点	1963年頃	アメジスト、金 6.0 × 6.8 × 4.3	昭和38年(1963) 国賓として来日の オランダ国王女王ベアトリックス殿下より
27	ガラード社	銀製小箱	1点	1971年頃	銀 8.7 × 9.0 × 4.0	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 英国ご訪問の 折、エリザベス皇太后より
28		ブローチ	1点	1966年頃	テクタイト、ダイヤ、金 10.0 × 5.6 × 3.1	昭和41年(1966) 国賓として来日の フィリピン共和国大統領より
29	アンドリュウ・グリマ	ブローチ	1点	1971年頃	ダイヤ、金 6.8 × 6.7 × 1.3	昭和46年(1971) 昭和天皇 香淳皇后 英国ご訪問の 折、英国女王エリザベス2世陛下より
30		ブローチ	1点	1984年頃	ヒスイ、パール、金 4.9 × 4.7 × 2.0	昭和59年(1984) 国賓として来日の ビルマ連邦社会主義共和国大統領より

Heartfelt Gifts — Works of Art Received

- In Course of Imperial Household's Friendly Exchanges with Foreign Countries

LIST OF EXHIBITS

1. Silver Flower Container  
ca.1898; niello, gold, silver  
32.8×32.8×36.5cm  
1898, Siam (Thailand), gift of King Chulalongkorn, Rama V  
Manufacture Nationale de Sèvres,  
original painting and design by C.Pihan  
1908; porcelain ware  
D40.0, H65.0 each  
1924, gift of President of French Republic on  
occasion of Crown Prince's marriage
2. Pair of Water Bowls of *Kimma* Inlay and Flower  
Design  
ca.1932; *Kimma* inlay, lacquer  
D62.0, H58.5 each  
1932, Siam (Thailand), gift of Prince Kambaeng Bejra
3. Purple Velvet Table Cloth with Embroidered Flower  
Design  
ca.1888-89; embroidery, silk, gold thread  
199.8×197.3  
1890, gift of Sultan Abdul-Hamid II of Turkey
4. Lion Hunting  
Early 20th century; Roman mosaic glass, marble  
47.0×75.0  
1924, gift of Pope Pius XI on occasion of Crown Prince's  
marriage
5. Caryatid Devastated  
François Auguste René Rodin  
1880-81; bronze  
22.0×25.0×43.0  
1921, gift of Japanese Residents Association,  
Paris on occasion of European tour by Crown Prince (Emperor  
Showa)
6. Statue of Athena  
Jules Coutan  
End of 19th-beginning of 20th century; bronze  
60.0×24.0×98.0  
1924, gift of four Imperial princesses on occasion of Crown  
Prince's marriage
7. Flower Vase with Plant Design  
Emile Gallé  
ca. 1896-1904  
glass, layer glass, etching  
D12.8, H33.5  
1971, gift of Premier of Rhineland-Pfalz state  
when Emperor Showa and Empress Kojun visited German  
Federal Republic
8. Pair of Flower Vases with Chrysanthemum and  
Ginkgo Design  
Manufacture Nationale de Sèvres,  
original painting and design by Horace Bieuville  
1920; porcelain ware  
D18.5, H45.5  
1921, gift of President of French Republic on occasion of visit to  
Europe by Crown Prince (Emperor Showa)
9. Flower Vase with Polar Bear Design  
Manufacture Nationale de Sèvres,  
original painting and design by Horace Bieuville  
1920; porcelain ware  
D18.5, H45.5  
1921, gift of President of French Republic on occasion of visit to  
Europe by Crown Prince (Emperor Showa)
10. Fan-shaped Screen with Gobelins Tapestry Ornament  
National Gobelins Manufactory,  
original design by Robert Bonfils  
1918; Gobelins tapestry, wool  
109.0×113.5; fan-shaped Gobelins tapestry, 76.0×101.5  
1925, gift of President of French Republic on occasion of 25th  
anniversary of Emperor Taisho's nuptials
11. Girl on River Volga  
Boris Kustodiev  
1916; oil on canvas  
210.0×239.0  
1928, gift of USSR on occasion of Emperor Showa's accession to  
throne
12. Jar with Lid  
Orrefors Glass Works, design by Edward Hald  
ca.1923; engraved glass  
D.25.0, H44.5  
1924, gift of King Gustaf V of Sweden
13. Jar with Lid  
Orrefors Glass Works, design by Edward Hald  
Early 1920s; engraved glass  
D21.0, H39.5  
1926, gift of Crown Prince and Princess of Sweden on their visit to  
Japan
14. Red Layer-Glass Flower Container  
Val Saint Lambert Glass Works, design by Hubert Fouarge  
ca.1923; glass, layer glass, cut  
D36.0, H39.0  
1924, gift of King Albert I of Belgium on occasion of Crown  
Prince's marriage

15. Red Layer-Glass Flower Vase  
Val Saint Lambert Glass Works  
ca.1928; glass, layer glass, cut  
D24.5, H56.5  
1928, gift of King Albert I of Belgium on occasion of Emperor Showa's accession to throne
16. Girl with Book  
Boris Kalin  
ca.1968; marble  
46.0×29.5×64.5  
1968, gift of President of Yugoslavia on his visit to Japan as state guest
17. Tapestry with Plant and Flower Design  
Ateliers Chaudoir, original design by Jean Van Noten  
ca.1971; Gobelins tapestry, wool  
223.0×150.0  
1971, gift of King Baudouin I and Queen Consort of Belgium when Emperor Showa and Empress Kojun visited Belgium
18. Southerly Wind  
Gustave Camus  
1971; oil on canvas  
112.7×144.7  
1971, gift of City of Charleroi when Emperor Showa and Empress Kojun visited Belgium
19. Four Seasons  
Finn Lynggaard  
1981; glass with enamel color  
D14.2-14.7, H14.2-15.0  
1981, gift of HM The Queen Margrethe II and HRH The Prince Henrik of Denmark when they visited Japan as state guests
20. White Bears  
Hadeland Glass Works  
ca.1983; crystal glass  
24.5×41.6×23.0  
1983, gift of King Olav V of Norway when he visited Japan as state guest
21. Blue Fish  
Royal Copenhagen Porcelain Manufactory,  
original design by Jeanne Grut  
ca.1971; porcelain  
55.5×110.0×18.5  
1971, gift of Royal Copenhagen Porcelain Manufactory on visit there by Emperor Showa and Empress Kojun
22. Cowboys  
Humberto Peraza  
ca.1978; bronze  
98.0×28.0×31.0
23. Gold-work Handbag  
ca.1956; gold  
15.5×11.5  
1956, gift of Emperor Haile Selassie I of Ethiopia when he visited Japan as state guest
24. Silver Face-Powder Container  
ca.1963; silver  
11.5×11.5×12.0  
1963, gift of HM The King Bhumibol and HM The Queen Consort of Thailand when they visited Japan as state guests
25. Shell-work Fan  
ca.1972; shell work, color on paper  
26.5×51.4  
1972, gift of HRH The Prince Juan Carlos and HRH The Princess Consort of Spain when they visited Japan as state guests
26. Amethyst Incense Box  
ca.1963; amethyst, gold  
6.0×6.8×4.3  
1963, gift of HRH The Princess Beatrix of Netherlands when she visited Japan as state guest
27. Small Box of Silver  
Garrard Co.  
ca.1971; silver  
8.7×9.0×4.0  
1971, gift of Queen Mother when Emperor Showa and Empress Kojun visited England
28. Brooch  
ca.1966; techtite, diamonds, gold  
10.0×5.6×3.1  
1966, gift of President of Philippines when he visited Japan as state guest
29. Brooch  
Andrew Grima  
ca.1971; diamonds, gold  
6.8×6.7×1.3  
1971, gift of HM The Queen Elizabeth II when Emperor Showa and Empress Kojun visited England
30. Brooch  
ca.1984; jade, pearls, gold  
4.9×4.7×2.0  
1984, gift of President of Burma when he visited Japan as state guest

[ 謝 辞 ]

本展開催準備にあたり、下記の機関、諸氏に資料提供や調査協力、御教示等をいただきました。記して深く感謝の意を表します。

[ Acknowledgment ]

Special thanks to the following organizations  
and people for their cooperation toward the preparation  
for this exhibition.

ベルギー大使館

De Wit, Royal Manufactures of Tapestry

大越久子

佐藤洋一

幸阪 勉

原田あゆみ

深井 宏

水田順子

(順不同、敬称略)

## 贈るころ・受けとられた美

—世界の国々との交流のなかで

三の丸尚蔵館展覧会図録 No.36

編 集 宮内庁三の丸尚蔵館

制 作 艸藝社

デザイン 金子英之 i2 design associates

翻 訳 鶴岡厚生

発 行 宮内庁

平成17年1月8日発行

©2005, The Museum of the Imperial Collections

## Heartfelt Gifts — Works of Art Received

— In Course of Imperial Household's Friendly Exchanges with Foreign Countries

The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan Exhibition Catalogue No.36

Edited by The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Produced by Sōgeisha Ltd.

Editorial Design by Hideyuki Kaneko and i2 design associates

Translated by Atsuo Tsuruoka

Published by Imperial Household Agency

Issued on January 8, 2005

©2005, The Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 贈るころ・受けとられた美

—世界の国々との交流のなかで

三の丸尚蔵館展覧会図録 No.36

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 艸藝社

デザイン 金子英之 i2 design associates

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成17年1月8日発行

©2005, The Museum of the Imperial Collections

## Heartfelt Gifts — Works of Art Received

— In Course of Imperial Household's Friendly Exchanges with Foreign Countries

The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan Exhibition Catalogue No.36

Edited by The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Produced by Sōgeisha Ltd.

Editorial Design by Hideyuki Kaneko and i2 design associates

Translated by Atsuo Tsuruoka

Published by Imperial Household Agency

Issued on January 8, 2005

©2005, The Museum of the Imperial Collections